

デヴィッド・ヒューム

とキリスト教 (I)

—— ヒュームの世界 ——

三 辺 清 一 郎

I

デヴィッド・ヒューム (David Hume 1711—76) は、「ロックとバークリーの経験論哲学を、その論理的帰結にまで発展させ、それを首尾一貫したものにすることによって、信じ難いものにしたことから、哲学者のあいだでもっとも重要なひとりの1人である。ある意味で、かれは1つの袋小路を代表している。かれのとった方向へは、もうそれ以上にゆくことは不可能なのである」というのが、バートランド・ラッセルの批評である。¹⁾かれの匿名(とくめい)の主著「人性論」A treatise of human nature: being an attempt to introduce the experimental method of reasoning into moral subjects. 3 vols. 1739—40は、かれが30代にもならない、1734年から1737年のあいだかれがフランスに住んでいたときに書かれたものである。²⁾かれはまだひじょうに若い青年であったし、また有名でもなかったから、かれは本書への「世人の称賛」をかれの「著作への最大の褒賞」として希望し、その批判は、どんなものでも「最善の教示」として受け取ることを述べていたのであったが、³⁾だれもかれの労作をかえり見るものがなかった。それは「印刷機から死んで生れ、熱心な信者たちのあいだにささやきを1つおこす取り扱いさえ受けなかった。」⁴⁾かれが本書でゆきついた結論のかずかずは、ほとんどすべての学派の歓迎しないようなものであったからである。⁵⁾

「おおよそ〔人間の〕心 The [human] mind に入る一切の物は、真実において、知覚 the perception としてある。⁶⁾」また「一切の知覚は、帰するところ、2つの別個の種類、ゝ印象、 Impressionsとゝ観念、 Ideasとにわかれる。⁷⁾」
「わたしは初めて心 the soulに出現した感覚sensations, 情緒 passions, 情感

emotions の一切を、この「印象」という名称につつま。」それらは「心を打って思想ないし意識 our thought or consciousness に入り込むとき、……極めて勢よく烈しく入ってくる。」⁸⁾「経験の教えるところによれば、どんな印象も、ひとたび心に顕われるときは、⁹⁾「観念」として再び心に出現する。」⁹⁾「単純な知覚」のばあいには、観念は、まさにかつて感じた印象の類似 resemblances または再現 representations である。だから「観念は、いわば印象の映像であると思える。」¹⁰⁾複雑な印象と複雑な観念とのあいだでは、大きな類似のあることも多いは多いけれども、しかし一をもって他の正確な模写であるとするのは、¹¹⁾普遍的には真でない。しかし複雑なものは、単純なものから造られるのである。だから、一般的にいえば、「知覚の2種類である印象と観念とは、正確に対応すると断言できるだろう。」¹²⁾しかしまた、印象と観念とでは、この2つのものが心に入り込むときに伴う「勢 force と生气 violence との程度」を異にする。「わたくしは、¹³⁾「観念」で、思考 thinking や推理 reasoning におけるこれら感覚、情緒、情感の淡い影像 the images を意味する。」

また印象が観念として再び心に出現するばあい、その現れかたに、(イ)「新しく出現するのに、初めの活気を多分に保留して印象と観念の中間の趣きを成すばあい」と、(ロ)「最初の活気をまったく失って、完全な観念であるばあい」との、2通りがある。初めのように印象を反復する機能は「記憶」the memory と呼ばれ、(ロ)の機能は「想像」the imagination といわれる。ひと目でわかるように、「記憶観念は想像観念よりもはるかに生气に富んで強く、想像機能がどんなに対象を判明に描くといっても、記憶観念の判明さにはおよばない。」¹⁴⁾しかし、「想像は原印象とおなじ順序、形式に拘束されない」で、「自由に観念を置き換えかつ変える。」この点「記憶は多少束縛されて、模様替えをする力能 power をすこしももたない。」¹⁵⁾「記憶と想像との相違は、…勢と活気の程度に、」すなわち「記憶が勢と活気の程度において、想像に優る点にある。」だから、「記憶観念は勢と活気を失って、そのために想像観念と取違えられる程度にまで落ちるばあいもあるし、また、想像観念が著しく勢と活気とを得て、そのために記憶観念として通用する……ばあいもある。」¹⁶⁾また一方、さきにも述べたように、印象と観念との相違は、この2つのものが心に入り込むときの「勢と生气との程度」の相違にある。だから「印象が観念と区別できないほどに淡く

微弱なことも時折りは起る」ことであるが、「精神がなんらかの激烈な情感に浸るときには、観念が印象に近づくことがあるのである。¹⁷⁾」こうしてわれわれは、「記憶観念として通用する想像観念」、またさらにすすんで、「印象と等価な記憶観念」ideas of the memory, which are equivalent to impressions, すなわち「記憶印象」the impression of the memory——それは「勢と生氣または活氣」において「印象と等価」であるがゆえに、「記憶印象」と名づけられるけれども、原印象の生氣ある再現であるのであるから、依然記憶ゝ観念、である——が考えられる。¹⁸⁾けれども「記憶機能も、想像機能も、ともに各自の単純観念を印象から採っており、この印象という根原的な知覚を越えることは、けっしてできない」のであって、¹⁹⁾しかも、記憶観念はもちろん、比較的に自由な想像観念でも、「対応印象が先きに進んで途を用意しないことには、心に出現することはできない」のである。²⁰⁾このことは、ヒュームの哲学を考えるばあい、いくら注意しておいてもしきれないほど重要である。

さらにまた、つぎのようなばあいがある。²¹⁾「まず印象が感官を打ってさまざまな種類の寒熱や飢渴や快苦を知覚させる」〔感覚の印象〕。この印象は心によって模写され、その模写は、印象がなくなったのちも残る。これが観念〔第1次観念〕と呼ばれる。この快苦の観念が精神面にもどると、欲望や嫌悪、希望や恐怖などの新しい印象を産み出す。この新しい印象は、内省に由来するゆえゝ内省の印象、impressions of reflexion と呼んでいい。この内省の印象は、さらに記憶や想像によって模写されて観念〔第2次観念〕となり、その観念はまた観念で、おそらく他の印象や観念を起すであろう。だから、内省の印象は、じぶんに対応する観念より前にあるだけで、感覚の印象よりは後れ、それから来るのである。²²⁾」こうして「初めの観念が印象から来ると想定されるかぎり」そしてまたさきに述べたように、「複雑なものは、単純なものから造り出される」のであり、またしたがって、「すべての単純観念は、直接もしくは間接に対応印象から生ずる」のであるから、²³⁾観念の源を印象に求めることは、「人性学 the science of human nature においてわたくしの樹立するゝ第1原理、the first principle である。」²⁴⁾——

「われわれは、知覚より以外の何物もけっして想うことができない。」²⁵⁾「心へ顕われるものは、知覚、すなわち印象および観念より以外にない。」²⁶⁾「このよう

に知覚のほかには何物もけっして心に顯われないし、……観念または印象と種類を異にするなにもものかの観念を想うこと、すなわち造ることもできない。」また「一切の観念は先行印象から採られる。²⁷⁾」「印象という知覚は、すべていささかの論争も許さぬまでに明瞭、明白である。²⁸⁾」この明瞭、明白な印象に、あらゆる観念の源がある、というのが、ヒュームの哲学の第1原理であるのである。

なおこのヒュームの第1原理を解するうえにおいて、注意しておくべきことが、いまひとつある。それはかれが「内省の印象は情緒 passions ないし情感 emotions に帰する²⁹⁾」ことを言っていることである。かれによれば、印象は、さきに述べたように「初めて心に出現した感覚、情緒、情感の一切」を含むものであった。しかしここに印象を構成するという「情緒」および「情感」は、いまいったように、内省の印象に属するのである。内省の印象は、感官による原印象の模写である観念の内省に由来する。ゆえに、印象を構成するものは、「感覚、情緒、情感」の3であるとはいえ、原生的には「感覚印象」だけである。情緒、情感は、観念が内省されて生れる感情観念である。ヒューム自身も「内省の印象すなわち情緒や欲望や情感は、大いに注意に値いするが、主として観念から起る³⁰⁾」としている。このこともヒュームの第1原理を理解するうえにおいて知っておかねばならぬ事柄である。

- 1) Russell, Bertland: History of Western Philosophy. 市井三郎訳, 下巻, p. 135.
- 2) [Hume, David:] The life of David Hume, Esq. writtin by himself. 1777. p. 6-7.
- 3) [Hume, David:] A treatise of human nature. 1 st ed. vol. I. 1739. Advertisement. p. XII. T. H. Green and T. H. Grosse ed. vol. I. 1874. p. 303. L. A. Selby-Bigge ed. 1888. p. XII. 大槻春彦訳, 「人性論」(一) p. 18.
- 4) Hume, D.: The life of David Hume, 1777. p. 7-8.
- 5) 「わたしはあらゆる形而上学者, 論理学者, 数学者の敵意に, また神学者の敵意にすら身を曝して来た。……わたしはかれらの体系の否認を言明して来た。」——Hume, D.: A treatise. 1st. ed. vol. I. p. 459. G.-G. ed. vol. I. p. 544. S-B. ed. p. 264. 大槻訳, (二) p. 118.
- 6) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 332. G.-G. ed. vol. I. p. 480. S-B. ed. p. 190. 大槻訳, (二) p. 19.
- 7) Ibid. 1st. ed. vol I. p. 11. G.-G. ed. vol. I. p. 311. S-B. ed. p. 1. 大槻訳, (一) p. 27.

- 8) Ibid. 1st. ed. vol. I. p. 11-12. G.-G. ed. vol. I. p. 12. S-B. ed. p. 1. 大槻
訳, (→) p. 27.
- 9) Ibid. 1st. vol. I. p. 23. G.-G. ed. vol. I. p. 317. S-B. ed. p. 8. 大槻訳, (→)
p. 36.
- 10) Ibid. 1st. ed. vol. I. p. 14-15. G.-G. ed. vol. I. p. 312-13. S-B. ed. p. 3.
大槻訳, (→) p. 29-30.
- 11) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 15. G.-G. ed. vol. I. p. 313. S-B. ed. p. 3. 大槻訳, (→)
p. 30.
「単純観念には、ひとつひとつ類似した単純印象があり、単純印象にはひとつひとつ
対応した〔単純〕観念がある。」しかし、「複雑観念の多数は、けっして自己に対応する
印象を過去にもたず、また複雑印象の多数は、けっして観念に正確に模写されない。」
——Ibid. 1st ed. vol. I. p. 14-15. G.-G. ed. vol. I. p. 313. S-B. ed. p. 3. 大
槻訳, (→), p. 29-30.
- 12) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 16. G.-G. ed. vol. I. p. 313. S-B. ed. p. 3. 大槻訳
(→) p. 30.
- 13) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 11-12. G.-G. ed. vol. I. p. 311. S-B. ed. p. 1. 大
槻訳, (→), p. 27.
- 14) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 23-24. G.-G. ed. vol. I. p. 317-18. S-B. ed. p. 8-9.
大槻訳, (→), p. 36-37.
- 15) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 24-25. G.-G. ed. vol. I. p. 318. S-B. ed. p. 9-10.
大槻訳, (→), p. 37-38. しかし、「記憶の主要な務めは、単純観念の保存ではなく、観念
の順序および位置の保存である。」—— Ibid. 1st ed. vol. I. p. 25. G.-G. ed. vol.
I. p. 318. S-B. ed. p. 9. 大槻訳, (→), p. 38.
- 16) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 153. 154. G.-G. ed. vol. I. p. 386. 387. S-B. ed. p.
85. 86. 大槻訳, (→), p. 144. 145.
- 17) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 11-12. G.-G. ed. vol. I. p. 311-12. S-B. ed. p. 1-2.
大槻訳, (→), p. 27-28.
- 18) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 148-49. G.-G. ed. vol. I. p. 384. S-B. ed. p. 82
-83. 大槻訳, (→), p. 140.
- 19) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 152. G.-G. ed. vol. I. p. 386. S-B. ed. p. 85. 大槻
訳, (→), p. 143.
- 20) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 24. G.-G. ed. vol. I. p. 318. S-B. ed. p. 9. 大槻訳,
(→), p. 37.
- 21) 大槻春彦氏は、ここの「印象」という言葉は、ヒュームの定義する意味とは違っ
て、当時の慣用例にしたがっていることに注意しておられる。——大槻訳, (→), p. 292
-93. 訳者注(4)。
- 22) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 22-23. G.-G. ed. vol. I. p. 317. S-B. ed. p. 7-8. 大
槻訳, (→), p. 35-36.

- 23) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 20. G.-G. ed. vol. I. p. 316. S-B. ed. p. 7. 大槻訳,
(1) p. 34.
- 24) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 21. G.-G. ed. vol. I. p. 316. S-B. ed. p. 7. 大槻訳,
(1), p. 34.
- 25) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 378. G.-G. ed. vol. I. p. 503. S-B. ed. p. 216. 大槻
訳, (2), p. 54.
- 26) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 123. G.-G. ed. vol. I. p. 371. S-B. ed. p. 67. 大槻
訳, (1), p. 118.
- 27) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 302, 301. G.-G. ed. vol. I. p. 558. S-B. ed. p.
634, 633. 大槻訳, (2), p. 147, 146.
- 28) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 65. G.-G. ed. vol. I. p. 340. S-B. ed. p. 33. 大槻訳,
(1), p. 70.
- 29) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 36. G.-G. ed. vol. I. p. 324. S-B. ed. p. 16. 大槻訳,
(1), p. 46.
- 30) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 23. G.-G. ed. vol. I. p. 317. S-B. ed. p. 8. 大槻訳,
(1), p. 36.

II

こうした第1原理から導き出される結論は、「わたしたちは考える、それゆえにわたしは存在する¹⁾」の「私」(わたくし)の存在を肯定することができなかった。

「ある哲学者たちは、われわれはどんな瞬間にも、いわゆる「自我」selfを親しく意識して、自我の存在ならびに自我の継続を感じ、自我の完全な同一性および単純性を論証以上に確認する、と想像する。……けれども不幸にしてここで説明せられているような在り方では自我観念は存在しない。²⁾」「自我観念はどんな印象から来るか。」この疑問は明白な矛盾と不合理に陥らないで答えることはできないと、ヒュームは言うのである。「もし自我観念を起すなんらかの印象があるとすれば、この印象は、人間の全生涯を通じて変動なく、おなじであり続けなければならない。なぜなら、自我はそうのように存在する、と仮定されているからである。」だが、「恒常的でかつ無変動な印象というものはない。」苦あれば快あり、悲哀ののちには歓喜が来、もろもろの情緒や感覚はつぎつぎに継起して、全部が同時に存在することは、けっしてない。したがって、自我観念のような観念はない。³⁾」

「わたくし自身についていえば、わたしが『わたくし自身』 myself とよぶものにもっとも親しく入り込むときには、わたしはいつも寒熱、明暗、愛憎、快苦のような、なんらかの特殊の知覚に出会うのである。わたしはどんな時にも、けっして知覚なしに『わたくし自身』をとらえることができない。またけっして知覚より以外のどんなものも見ることができない。」そして「もしだれかが真面目な、偏見にとらわれない内省ののちに、これとは異なった『かれ自身』 himself の思念 a notion を有つと考えるならば、わたしは、もはやそのひととは手を携えて論究することはできない」と、かれは強調した⁴⁾。そしてかれは、「人間とは、思いもおよばない迅さで、つぎつぎに継起する久遠の流転と動きとの裡にある、さまざまな知覚の束ないし集合 a bundle or collection に過ぎない」と結論した⁵⁾。

かれはまたつぎのように言っていた。「熟睡した時のように、わたくしの知覚がしばらくのあいだ除去されるときは、そのあいだだけ『わたくし自身』 myself を感じない。したがってわたしは存在しない not to exist と真に言うことができる。そしてもしわたしが死んで一切の知覚が除去されたとすれば、すなわち、身体が壊滅したのち、考えること、感じること、見ること、愛すること、憎むことができなくなったとすれば、わたしはまったく消滅してしま⁶⁾う。」かれによれば、「ひとびとは宗教上のことになる⁷⁾と、脅かされて快感を覚える⁷⁾」というのであるけれども、ひとしくかれによれば、死後の恐怖はありえない道理である。すくなくとも「来世は了解するにあまり遠く、身体が壊滅したのちの存在様式に関する観念は、はなはだしくあいまい、不十分である⁸⁾。」一般大衆はあらたまった無信仰の形式的原理をもっているというわけではないけれども、「魂の永遠な持続」The eternal duration of their souls の信念と⁹⁾いったようなものはもっていないと見ていた。

1) デカルト「方法序説」小場瀬卓三訳、p. 25. 同「哲学の原理」榊田浩三郎訳、p. 116. (世界大思想全集、哲学、文芸思想篇 7.)

2) Hume, David. A treatise. 1st ed. vol. I. p. 436-37. G.-G. ed. vol. I. p. 533. S-B. ed. p. 251. 大槻訳、(二)、p. 101.

3) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 437-38. G.-G. ed. vol. I. p. 533. S-B. ed. p. 252-53. 大槻訳、(二)、p. 101-02.

4) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 438-39. G.-G. ed. vol. I. p. 534. S-B. ed. p. 252. 大

概訳, (二), p. 102-03.

- 5) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 439. G.-G. ed. vol. I. p. 534. S-B. ed. p. 252. 大概訳, (二), p. 103.
- 6) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 437-38. G.-G. ed. vol. I. p. 534. S-B. ed. p. 252. 大概訳, (二), p. 102.
- 7) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 204-05. G.-G. ed. vol. I. p. 414. S-B. ed. p. 115. 大概訳, (一), p. 186.
- 8) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 203. G.-G. ed. vol. I. p. 413. S-B. ed. p. 114. 大概訳, (一), p. 184.
- 9) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 202. G.-G. ed. vol. p. 413. S-B. ed. p. 114. 大概訳, (一), p. 184.

III

ヒュームは、おなじ原理に立って、神の存在を肯定することもできなかったに違いない。かれは「想われるものは、すべて存在すると想われる。¹⁾」「われわれが「神在(いま)す、 God is existent と断言するときわれわれの造る観念は、……かれ(神)のわれわれの心に顕われるままの「在るもの、 such a being as he is represented to us の観念である²⁾」という。しかし「知覚のほかにはなにもものも心に顕われない。³⁾」「真に心へ顕われるものは、心の知覚すなわち印象と観念とよりほかにはない³⁾」と強調するかれが、「在るもの、としての神の観念を、はたして「どんな印象から来る」(cf. 本稿II. p. 6.) ということができたであろうか。

また、おなじ原理に立って、かれが神 Deity⁴⁾ の力能 power を肯定できなかったのは、言うまでもない。

デカルト派の哲学者たち Cartesians は、物質はそれ自身ではまったく非能動的であって、運動を産み、続け、伝達する力能をまったく奪われている。けれどもこのような〔運動産出その他の〕諸結果は感官に明白である。このような結果を産む力能はどこかに存しなければならない。それは「神、 the Deity, すなわちあらゆる卓越と完全とを本性上保有する神的なもの a divine being なければならない。神 ^{デューイテイ}こそ宇宙の首動者であり、物質を最初に創造して物質に根原の衝撃を与えただけでなく、全能 omnipotence の連続的発動によって物質の存在を支持する、⁵⁾と説いていた。これはたしかに「心を惹く、説明では

あるけれども、ヒュームにしてみれば、検討の要のないものであった。⁶⁾ なぜなら、「あらゆる観念は、印象すなわち先行知覚から来るのである。だから、ここにいう力能の発動が知覚される、ある実例を提出することができないかぎり、われわれは力能および効力 efficacy に関してどんな観念ももつことはできない。」⁶⁾しかるに、こういった実例は、物体のうちにけっして発見できない。⁶⁾そこでデカルト派は「その説く本有観念の原理 the principle of innate ideas にたよって最高位の霊 a supreme spirit すなわち ^{ダイーイテイ}神 にすぎり、^{ダイーイテイ}神 を宇宙における唯一の能動者と考え、物質のあらゆる変動の直接原因と考え」⁶⁾た。しかしながら、「本有観念の原理が虚偽であることは、すでに認められているのだから、⁷⁾ 感官に顕われる事物や内的に自己の心に意識される事物のうちに探し求めて無駄であった作力 agency の観念を説明するのに、^{ダイーイテイ}神 の仮定はすこしも役立つことができない道理だ」からである。「一切の観念が印象に由来するとすれば、^{ダイーイテイ}神 の観念も 同一起原から生ずるわけであり、また、感覚印象も内省印象も力ないし効力をすこしも含まないとすれば、かような能動原理をすこしでも ^{ダイーイテイ}神 に見出すことは、いな、想像することすら、等しく不可能である。⁶⁾」

こうしてかれは、「物体にも霊 spirit にも、上位の性質 superior nature にも下位の性質にも、力能ないし効力の実例をただの一つも見出し得ないがゆえに、⁸⁾ 力能ないし効力の十全な観念はどんなもののうちにも無い」と結論し、「原因すなわち産出原理のような物は、宇宙にまったくない。^{ダイーイテイ}神 自身でさえこうしたものではないと、真に断言する」⁹⁾と断言した。

- 1) Hume, D.: A Treatise. 1st ed. vol. I. p. 122. G.-G. ed. vol. I. p. 370. S-B. ed. p. 67. 大槻訳, (-), p. 117. cf. p. 300. 訳者注(6), 「いやしくも意識に上ぼり、記憶に存するかぎりには、ことごとく存在すると想われる。」—— Ibid. vol. I. p. 121. G.-G. ed. vol. I. p. 370. S-B. ed. p. 66. 大槻訳, (-), p. 116.
- 2) Ibid. vol. I. p. 168. G.-G. ed. vol. I. p. 394 S-B. ed. p. 94. 大槻訳, (-), p. 157.
- 3) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 123. G.-G. ed. I. p. 371. S-B. ed. p. 67. 大槻訳, (-), p. 118
- 4) ヒュームは宗教に関して、つとめて聖職者たちの用語をさけているのではないかというのが、本学藤間繁義助教授の示唆であり、GodとDeityとはおなじ概念であるというのが、おなじく本学の八代崇助教授およびセイドウ文化センター Rev. J. R. Madurga

の教示である。のちの witness および testimony とかれの用語 evidence についても、おなじことが言えると思う。(後述参照。)

- 5) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 280. G.-G. ed. vol. I. p. 454. S-B. ed. p. 159. 大槻訳, (一), p. 247.
- 6) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 280-81. G.-G. ed. vol. I. p. 454. S-B. ed. p. 160. 大槻訳, (一), p. 247-48.
- 7) 本有観念はすでにロックによって否定的に批評されていた。Ibid. 大槻訳, (一), p. 291. 訳者注²³⁾. John Locke: An essay concerning human understanding. ed. Raymond Wilburn. ch.III.p. 14-. 加藤卯一郎訳, 上巻, p 40-.
- 8) Hume, D.: A treatise. 1st ed. vol. I. p. 282. G.-G. ed. vol. I. p. 455. S-B. ed. p. 160. 大槻訳, (一), p. 248.
- 9) Ibid. 1st ed. vol. I. p. 432. G.-G. ed. vol. I. p. 531. S-B. ed p. 248. 大槻訳, (二), p. 97.

IV

ヒュームはまだおそらく「人性論」の筆をとっていた1730いく年のころ、「奇跡に関する論考」Reasonings concerning miracles を準備していた。この論稿は、「人間悟性の研究」An enquiry concerning human understanding, 1748 の1節「奇跡について」Of miracles として同書に収められている。¹⁾

ヒュームは本論稿で、²⁾「真の臨在」the real presence に関して、「聖書または聖伝の權威が、われわれの救主 Saviour がみずからの聖なる使命を証し給うたもろもろの奇蹟の目撃者であった使徒たちの証し the testimony のうちにだけ基づいていることは、各方面で認められているところである。こうしてキリスト教の真理に対するわれわれの証驗 evidence は、われわれの感官の真理にたいする証驗よりもより薄弱である。なぜなら、それはわれわれの宗教の創建者たちにあってさえ、感官の真理にたいする証驗以上に強大なものでなかったのだから。そしてまたかれらからその弟子たちに伝えられるにつれて、その証驗は弱まらざるをえないし、また、だれであってもじぶんの感官の直接の対象におく³⁾ほどの信頼を、使徒たちの証しにおくことができないのは、明らかである。しかもより弱い証驗は、それよりもより強力な証驗を破りうるものでない。だからまた、かりにも真の臨在の説が聖書に明瞭に啓示されているとしても、われわれがそれを主張するのは、正しい推理の諸法則に直接に違背するこ

となる。真の臨在の説は、そのよりどころとなっていると想定される聖書と聖伝が、いずれも感官ほどの証驗を伝えるものでないというのであっても、それらがただ外的な証驗に過ぎないと考えられ、聖霊 the Holy Spirit の直接の作用によってわれわれのひとりびとりの胸のうちにもたらされぬばあいには、感覚と矛盾する、³⁾ というティロットスン John Tillotson の論旨を、「まじめな論駁に値いしない」臨在説に対する、この上ない反論として紹介している。

かれは「奇跡 a miracle とは、自然の諸法則の違背 a violation である」⁴⁾、さらに正確には、「神 the Deity の特殊意思あるいは目に見えない発動者の介入による自然法則の違反 a transgression である」⁵⁾と定義している。ヒュームでは、自然法則は、「確乎たる不変の経験」の確立するところである。⁴⁾「すべての人間は死ななければならない。弾丸はひとりでに空中にぶらさがっていることができない。火は木を焼き、水で消される。」³⁾「どんなことでも、それがひとたび自然の通常過程のなかで生ずるとなると、奇跡とはみなされない。みかけが壮健なひとりの男が突然死ぬようなことがあっても、それは奇跡ではない。なぜなら、こういった種類の死は、ほかのどれかに比べればいくぶん尋常でないにしても、やはりそれはしばしば生ずるのが認められてきたことであるからである。しかし死人がよみがえるようなことが起れば、それは奇跡である。なぜなら、そうしたことはいずれの時代でも、どここの土地でもかつて見られたことがないからである。」⁶⁾ときにある事象が本来自然法則の諸法則に反するものであるように思われないことがあるかも知れない。「しかもそれが、すなわち自然法則に反することが、真実であるとすれば、それはなにかの事情のあることであって、奇跡と名づけてよろしいだろう。なぜなら、事実が自然諸法則に反しているのだからである。」こうして「ある人物が神聖な権威を主張して、病人が癒(い)え、健康な人が死に、雲が雨を降らし、風が吹くように指図をする。つまりかれが多くの自然事象に命令して、それらの自然事象がただちにこれに従うとすれば、これらの事象はまさしく奇跡と見做していいだろう。なぜなら、それらは、このばあいには、真実に自然の諸法則に反しているからである。」⁵⁾

けれどもかれは、この自然諸法則の違反である奇跡の真実性を、蓋然性にもおよばないとした。「どんな種類の奇跡にたいする^{デステイモニ}証しでも、立証 a proof

にはいうにおよばず、蓋然性 a probability にまでもかつて達したことがない
ように思われる。⁷⁾「論理はつぎのようなものであった。『事実に関する論考にお
いては、経験がわれわれの唯一の導きである。』⁸⁾「いずれの奇跡的事象にも、齊
一的な反対する経験が存しなければならない。もしもそうでなければ、その事
象は、奇跡の名称にふさわしからぬものとなるだろう。』⁹⁾「たった1つの矛盾す
るばあいを伴う100の齊一的経験事實は、当然にかなりの強度の確信をもたら
す。¹⁰⁾「けれども皮肉なことには、¹¹⁾「ひとつの齊一的経験事實が立証の域に到達し
たときには、『事実、the fact の本性よりして、どんな奇跡の存在にも反対す
る、直接かつ完全な『立証』が、すでに成立しているのである。』その點には、
このような立証は破壊できるものではない、そしてそれにうち勝つだけの反対
立証を立てないかぎり、奇跡を信頼のもてるものにかえすことはできないので
ある。』⁹⁾

かれの考えるところにしたがえば、「あらゆる種類の推理のなかで、ひと
びとの証^{テストイモニ}しや目撃者、傍観者たちの報告から導き出されるものが、もっとも
普通に見られるものであり、人間生活にもっとも有用であり、またもっとも必
要でさえある。¹²⁾しかし「証し witnesses や人間の証し human testimony から
導き出さる証驗 the evidence は、過去の経験にもとづいており、またしたが
って、それは経験により差異がある。¹³⁾「賢明なひとはその信念 belief をその証
驗に相応させている、¹⁴⁾「証し^{テストイモニ}が確定しようと努めている事実が、
異常なものや驚くべきものを含んでいるばあいを考えるならば、そのばあい
には、その証し^{テストイモニ}からする証驗^{エウデンス}は、その事実の異常さの程度に応じて低減する。¹⁵⁾
「どんな種類の奇跡に対する証し^{テストイモニ}であっても、立証にはいうにおよばず、蓋
然性にまでもかつて達したことがなく、またかりにその証しが立証までに達し
たとしても、それがうち立てようとした事実の性質そのものから導き出され
る、別の立証から反駁されるように思われる。¹⁶⁾」だから、「どんな人間の証し
human testimony であっても、奇跡を立証し、そしてそういったどんな宗教
の組織の正しい基底とするような力をもつことはできない、¹⁶⁾」とかかれは推論し、
「キリスト教は、初めにもろもろの奇跡を携えていただけでなく、今日におい
てさえ、奇跡なしには理性を具えたなにびとにも信じられ得ない。理性だけで
はキリスト教の真実性をわれわれに納得させるには足らないのである。そして

奇跡に同意する「信仰、Faith に動かされるひとは、なにびともじぶん自身の「人格、person のなかにたえず奇跡を意識し、それによって自らの知性の諸原理の一切がくつがえされ、もっとも習慣と経験に反していることを信じるよう¹⁷⁾ 限定を受ける」と結論して、この1節を結んだ。

かれは「人性論」では、「〔宗教的〕迷信はその体系および仮説において哲学よりはるかに大胆である。けだし哲学は可視界に現われる現象にたいして新しい原因と原理とを設定することだけで甘んずる。しかるに、迷信は、じぶん自身の世界を展開して、まったく新しい場面や存在物や対象を顕わす。」「一般的にいえば、宗教の錯誤は危険であり、哲学の錯誤は滑稽なだけである¹⁸⁾」といていた。こうしたヒュームの考え方が、聖職のひとたちの氣にいらはずはなかった。

- 1) 本論稿の成立および発展までのいきさつについては、cf. T. H. Green: History of the Edition. p. 50. E. C. Mossner: The life of David Hume. p. 101, 111-12, 207.
- 2) cf. Hume, David: A treatise, 1st ed. I. p. 255. G.-G. ed. vol. I. p. 441. S-B. ed. p. 145. 大槻訳, I. p. 227.
- 3) Hume, David: Essay and treatises on several subjects. A new edition. Lond. 1767 vol. II. An enquiry concerning human understanding. p. 123-24. Essays moral, political, and literary. ed. T. H. Green and T. H. Grose. vol. II. An enquiry concerning human understanding. p. 88-89. Enquiries concerning the human understanding and concerning the principles of morals. ed. L. A. Sellby-Bigge. 2. ed p. 109. 「人間悟性の研究」福鎌達夫訳, p. 189-90.
- 4) 「奇蹟とは、自然の諸法則の違背である。そして確乎たる、不変の経験がこれらの法則を確定してきた。」Ibid. n. ed. vol. II. p. 128. G.-G. ed. vol. II. p. 93. S-B. ed. p. 114. 福鎌訳, p. 198. ヒュームがここで自然法則も経験の樹立するところであることを言っていることは、「人性論」における所論と 考えあわせて重要である。後述を参照。
- 5) Ibid. n. ed. vol. II. p. 129. note. G.-G. ed. vol. II. I. p. 93. note 1. S-B. ed. p. 115. note 1. 福鎌訳, p. 200. 原注。
- 6) Ibid. n. ed. vol. II. p. 129. G.-G. ed. vol. II. p. 93. S-B. ed. p. 115. 福鎌訳, p. 199.
- 7) Ibid. n. ed. vol. II. p. 144. G.-G. ed. vol. II. p. 105. S-B. ed. p. 127. 福鎌訳, p. 225. 「証し witnesses や人間の証し human testimony から導き出された証験 the evidence は、過去の経験にもとづいており、またしたがって、それは経験によって差異がある。そしてなにか特殊な種類の報告と、 なにか特殊な 種類の 対象とのあい

- だの連接 the conjunction が不変であるか、可変であるか見出されるに応じて、立証 a proof または蓋然性 a probability と見做される。」——Ibid. n. ed. vol. II. p. 126. G.-G. ed. vol. II. p. 91. S-B. ed. p. 112. 福鎌訳, p. 194-95. 「人性論」では、「立証 proofs によって、……疑惑および不確実から全く免れている議論 arguments が、また蓋然性 probability によって、まだ不確実に伴われている証驗 evidence が」意味されている。——A treatise. 1st ed. vol. I. p. 220. G.-G. ed. vol. I. p. 423. S-B. ed. p. 124. 大槻訳, (→), p. 199.
- 8) Hume, D.: Essays. n. ed. vol. II. 124. G.-G. ed. vol. II. p. 89. S-B. ed. p. 110. 福鎌訳, p. 191.
- 9) Ibid. n. ed. vol. II. p. 129. G.-G. ed. vol. II. p. 93. S-B. ed. p. 115. 福鎌訳, p. 199-200.
- 10) それがヒュームにおける「奇跡」である。
- 11) Hume, D.: Essays. n. ed. II. p. 125. G.-G. ed. vol. II. p. 90. S-B. ed. p. 111. 福鎌訳, p. 193.
- 12) Ibid. n. ed. vol. II. p. 125. G.-G. ed. vol. II. p. 90. S-B. ed. p. 111. 福鎌訳, p. 193.
- 13) Ibid. n. ed. vol. II. p. 126. G.-G. ed. vol. II. p. 91. S-B. ed. p. 112. 福鎌訳, p. 194.
- 14) Ibid. n. ed. vol. II. p. 124. G.-G. ed. vol. II. p. 89. S-B. ed. p. 110. 福鎌訳, p. 192.
- 15) Ibid. n. ed. vol. II. p. 127. G.-G. ed. vol. II. p. 91. S-B. ed. p. 113. 福鎌訳, p. 196.
- 16) Ibid. n. ed. vol. II. p. 144. G.-G. ed. vol. II. p. 105. S-B. ed. p. 127. 福鎌訳, p. 225.
- 17) Ibid. n. ed. vol. II. p. 147. G.-G. ed. vol. II. p. 108. S-B. ed. p. 131. 福鎌訳, p. 232. person を「人」と訳するについては, cf. ルカ, 15・7.
- 18) Hume, D.: A treatise. 1st ed. vol. I. p. 470-72. G.-G. ed. vol. II. p. 550-51. S-B. ed. p. 271-72. 大槻訳, (→), p. 127-28.

V

ヒュームは1776年死の直前に「自伝」My own life を書いていた。この小伝は、その翌年、かれの死後、アダム・スミスの手紙形式の頌詞（しょうし）と添えて出版された。¹⁾ スミスはそのなかで、ヒュームが死の床にあってつとめて快活にふるまい、自著の校正や読書に日を消し、友人と話したり、ホイストと遊んだり、ルシエンの「死者の対話」を読んだ感想を冗談まじりに語ったことなどを伝え、こうしてわれわれのもっともすぐれた、忘れられない友は逝い

た。その哲学上の所見についてはひとのおのその見解にしたがって是認もし、非認もするだろう。けれども人格と行状にいたっては、意見のわかれる余地がない。おそらくかれの性格は、ほんとうにわたしがこれまで知っていただけよりも均斉がとれていた。「要するに、わたくしは、かれを生前にも死後にも、人間の弱い性格の、おそらく許しうるだけの完全な賢者、有徳のひとという観念に近い人であった、と考える」と結んだ²⁾。しかし篤信のひとには、宗教心のないものが有徳な生涯をおくったり、安らかな死が遂げられたりするはずがない。これらのひとたちには、これまで紹介したような思想のもち主であるヒュームは、「計画的な異端者」、「キリスト教の覆滅を強行する1種の哲学を編み出すのが、かれの目的であり、そしてまたかれはそのために生きた。かれの望みは、厳しい、悔悟のない、そうだ、楽しい幸福な死をさえ遂げる、あるいは遂げると思われて、世のなかにじぶんの理論の力を誇示することにある」³⁾と思われた。

スミスの手紙が公にされたとおなじ年、つまりヒュームの「自伝」公刊の年にジョージ・ホーン George Horne が「法学博士アダム・スミスに寄せる手紙。かれの友達デヴィッド・ヒュームの生涯、死、および哲学について。キリスト教信徒とよばれるものの1人によって。」A letter to Adam Smith LL. D. on the life, death, and philosophy of his friend David Hume Esq. By one of the people called Christians. Ox. 1777, を書いた。ホーンはオックスフォード、マグダレン・カレッジの学長、「詩篇注解」Commentary on the Psalm 1771. の著があり、のちにノーヴィッチの主教となったひとである⁴⁾。

かれによれば、ヒュームのなかまは「宗教の敵」⁵⁾であり、かれらの哲学の構想は、「真理と慰め、救いと永遠、未来の国および摂理の各観念、いな神 God そのものの存在をさえこの世から払拭する」ものであった⁶⁾。「かれはそんなにもしばしば人間の心から、⁷⁾「神」の英知とその律法のあらゆる痕跡を、かれの愛情あふれる摂理と父のような保護への信仰を、またかれの現世および来世における恩寵と慈恵を、かれおよびかれのためにする人間の兄弟たちの愛のすべてを、苦難な折りの耐忍のすべてを、涸れるを知らない泉からこんこんと流れでる、悲しみのときにおける慰めのすべてを、ことごとく拭いさるために、沈思、静座した。」かれにはヒュームは、「⁷⁾「宗教」とよばれるあらゆるものに癒

(い) やすことのできない反感をもつかに思われ、できたらその名をさえ記憶から拭い去るために、その精神〔宗教心〕をひとびとのあいだから追い出し、根こそぎにするために全精神を投げ込んだひと⁸⁾」と思われたのである。

ホーンはこの小冊子に、ある学識あるひとによってなされたヒュームの哲学体系の要約であるとして、つぎのような文章を紹介している。――

「魂 (たましい) the soul について、

魂はなんであるか、わからない。魂は1つのものでもあり、また数多いものでもあり、またさらに、まったく無のものでもある。魂のなかに、有感被造物の全部にはたらく、あらゆる諸原因の作力 agency が存在する。しかもまたこの魂のなかに力能 power も作力も、またこれら2つのものの観念もない。物質と運動とは、しばしば思惟 thought の原因と考えられる。⁹⁾

「宇宙について、

外界 the external world は存在しないか、またはすくなくとも理知的 reasonably には存在が疑わしい。

宇宙は心 the mind のなかに存在する。しかも心は存在しない。

宇宙は、実体 a substance のない、知覚の積み重ねである。

宇宙にあるすべてのものが、ある原因から生ずると信じたり、また信ずる理由をみつけることはできるけれども、宇宙そのものが、ひとつの原因から生ずると信ずるのは、不合理である。¹⁰⁾

「人間の知識について、

人間の知識の完全性は疑うべきである。

われわれはすべての物を疑うべきである。いやわれわれの「疑い」そのものも疑うべきである。だから、哲学のなすことができる極限は、疑わしいもろもろの疑いに、疑わしい解決を与えることである。¹¹⁾……」

「神 God について、

宇宙に害悪と不秩序があるかぎり、「神」God が限りなく賢く、善であると、信ずるのは不合理である。

われわれは宇宙が1つの原因から生れ出ていると考える、十分な理由をもたない。

外界の存在が疑わしいのだから、われわれは「最高位の存在」The Supreme

Being とその属性の存在を立証できる論理を見つけるのに迷ってしもう。

われわれがどんな存在でもの——^{ゴッド}「神」、さえもその例外ではない——の属性として力能 Power を口にするときは、われわれは意味のない言葉を用いているのである。

われわれは、力能の、あるいは力能を賦与せられた「在るもの」、a being の観念をつくることができない。ましてや無限の力能を 賦与せられた「在るもの」の観念は、なおさらつくことはできない。

われわれは、観念をつくることができないどんな対象でもの、またその性質¹²⁾もの、存在すると信ずべき理由は、けっしてもっていない。」

- 1) この小冊子の出版までの経過については、わたくしは、かつて小稿「アダム・スミス書誌拾遺」（三田学会雑誌，第38巻第5～6号 p.80-）で、やや詳しく紹介しておいたことがある。
- 2) Smith, Adam: Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq. in “The life of David Hume. Esq. witten by himself” 1777. p, 59, 62.
- 3) 小稿「アダム・スミス書誌拾遺」（三田学会雑誌，第38巻第5～6号）p. 85.
- 4) 同稿，p. 86. カール・マルクス「資本論」，向坂逸郎訳，~~四~~p. 102-03. note. 参照。
- 5) [Horne, George:] A letter to Adam Smih. 1777. Advertisement. p. ii.
- 6) Ibid. p. 8.
- 7) Ibid. p. 16.
- 8) Ibid. p. 10-11.
- 9) Ibid. p. 39-40.
- 10) Ibid. p. 40-41.
- 11) Ibid. p. 41.
- 12) Ibid. p. 43-44.

追 記 本稿は昭和41年2月28日桃山学院大学キリスト教研究室例会において報告したものに加筆したものである。報告のさい，出席の各諸先生の御教示を得たことを記して感謝の意を表する。